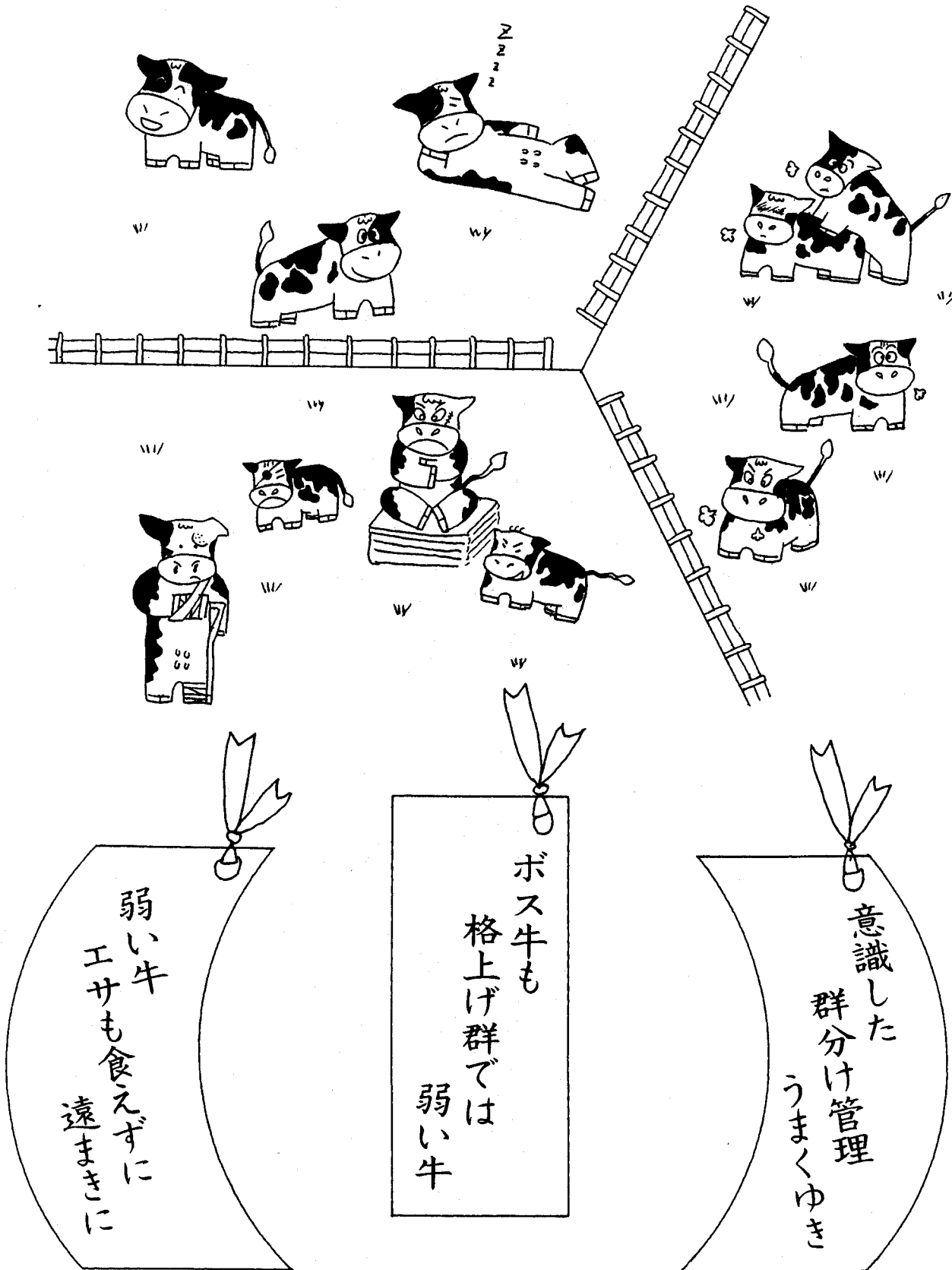


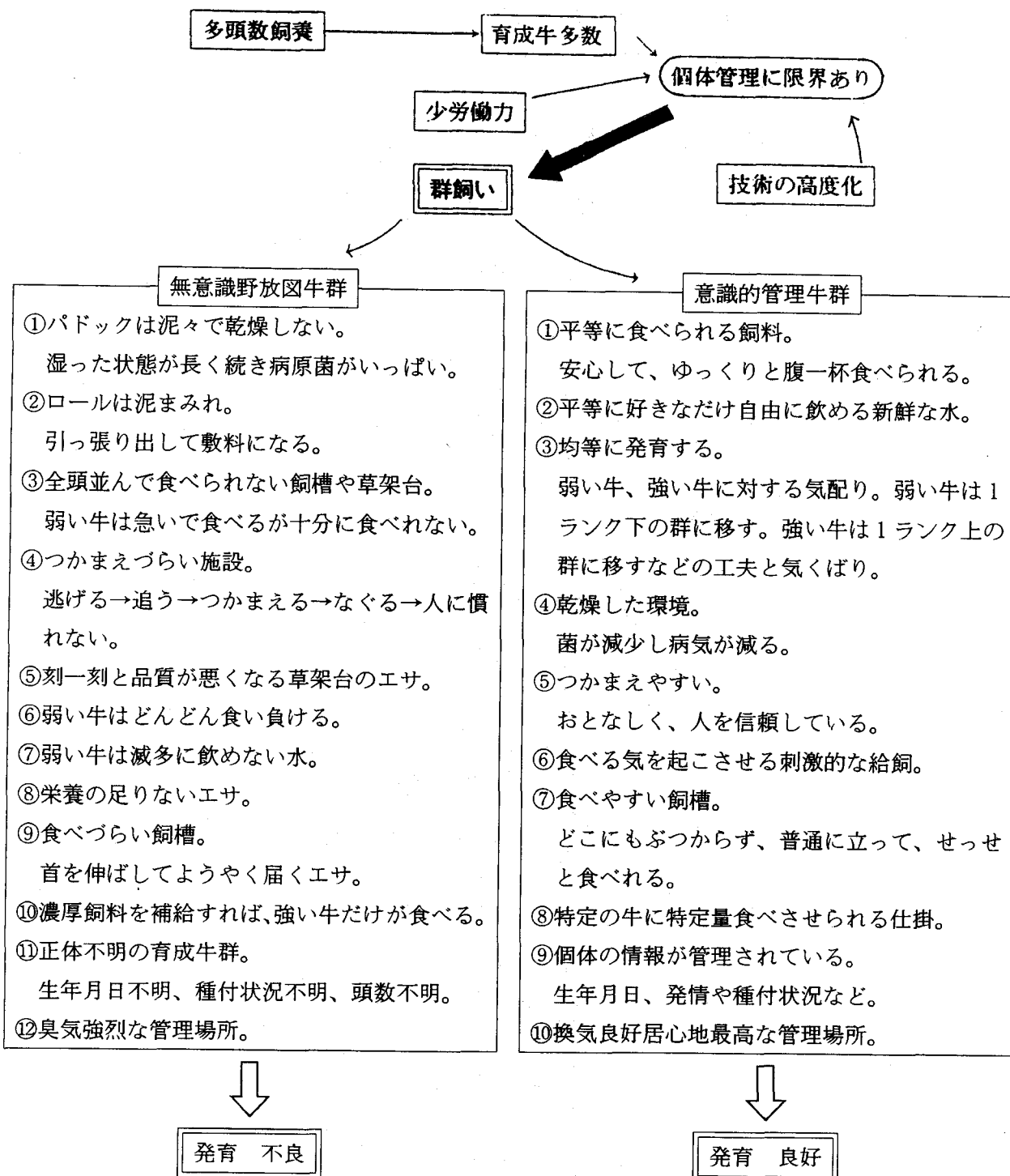
VII. 群分け管理

仕事は楽々、牛はスクスク
—群分け管理最大の利点を引き出すために—



1. 生きものを扱うことにもっと関心と工夫を・・・

(1) 意識して管理することの大切さ



数頭づつまとめて飼っているから群分け管理をしているという事にはなりません。何となく群にしているような状態では群分け管理の利点は生かされません。意識して群分けする事によって牛にとっては発育が良くなり、持って生まれた発育の可能性により接近する事ができます。そしてそれは人にとっても、ムダな作業が少くなり作業効率が上がります。

2. レイアウトのまずさはアナタをとことん苦勞させます

(1) 施設面

①牛の移動が楽—最短距離を移動する。

新しく施設をつくる場合や既存施設を効率良く使う改造、増築を考える場合、作業動線をしっかりと考えなおさねばなりません。出生—哺育—育成—分娩—搾乳—乾乳という一連の流れが最短距離の移動で可能になるような施設の配置を考えましょう。

②人の作業動線を考える

住宅を出てから親牛舎に行くまでの径路でどのような管理作業をするかを考える。哺育牛は、人間に慣れさせるためにも農場で人が良く通る場所で管理する事が望ましい。この事によって哺育牛の異常を早期発見する事もできます。そのような事も含めて作業動線を考えましょう。

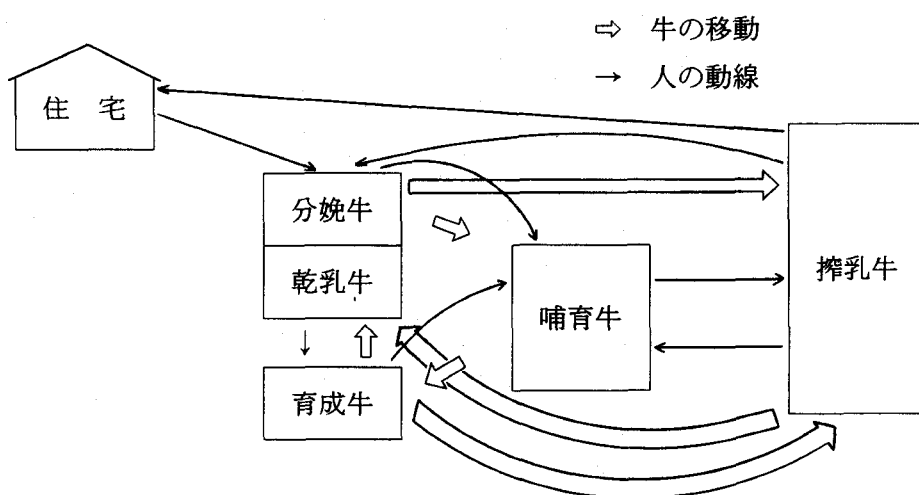


図-1 人の作業動線と牛の移動例

図-1のように人は住宅から分娩牛→乾乳牛→育成牛→**哺育牛**の流れで牛の状態を観察してから搾乳牛舎へ入ります。哺育をするために**哺育牛**の所へ行く。乾乳・分娩・育成牛舎の除糞などの作業をするために**哺育牛**の前を通過して移動する。全ての作業が終了住宅にもどる際に途中**哺育牛**の前を通過。この例でいけば4回も哺育牛を観察する事が可能になります。牛の移動は⇒で示す径路です。先に述べたように最短距離の移動で済むように考えます。このようにできる限り作業が楽で牛の観察もできるような動線を考えましょう。

③機械の動線を考える

図-1にさらに機械の動線が加わります。給飼、除糞作業をどのような流れで行うか考えなければなりません。飼料貯蔵施設がどこにあるか、搾乳牛舎は対頭式か対尻式かフリーストールか、乾乳・分娩・育成牛の牛舎の形はどうなっているのかなどの条件をふまえて飼料を取り出しやすく、給与しやすく、片づけやすい施設の配置や飼槽のデザインが重要です。

人にとっても牛にとっても都合の良い作業をするためにもどのような群に分けて、どのように移動させるかを搾乳牛・乾乳牛の移動も含めて考えるべきです。さらに人、機械の作業動線

も十分に考えて農場の全体図をつくりましょう。

④隣の群とゲート越しに接触できる。

常にゲート越しで見合っていれば、隣の群に馴染みやすくなります。さらに数頭ずつ移動させる事で序列争いが分散し、ストレス緩和にもつながります。

⑤つかまえやすい

種付けや何らかの目的のためにつかまえやすい施設にする。哺育期から人に馴れさせて、人を敵と思わせなければ難なくつかまえられるようになります。そうなれば最高です。

(2) 管理面

①飼養目的別に群にする事によって管理作業の効率が上り、かつ牛にとっても適切な技術（飼料給与等）が提供できます。それによって順調に発育していきます。

②乾乳牛と同じ飼料を食べていても分娩間近の育成牛だけを1群で管理する事は発育の面で非常に意味のある事です。

③混合飼料を給与する場合に1群当りの頭数が少なければ、エサの量も少ないので十分に混らないで選び食いされる恐れがあります。そうなれば、1頭1頭配の方が効率良いかも知れません。この場合盗食防止の工夫が必要です。

3. 群分けの具体例

以下に群分けの具体例を示します。特に根室の場合には生後5～6カ月以降に刈り遅れの乾草を与えられて育成牛舎にほったらかしにされているような状況をよく目にします。この時期は先に述べた通り乳腺が発達する時期でもあります。この時に刈り遅れの乾草を与えられて栄養不足になり、しかもエネルギーとタンパクのバランスがくずれてしまえば発育不良で小太りの牛になります。このような状況では体も乳腺も発達を阻害され将来の牛乳生産に悪影響を及ぼします。

根室地域の育成牛の発育は5～7カ月令頃より、発育の下限標準をずれてきます。これも4～5カ月令以降の栄養不足が発育に大きく影響しているからです。

時 期	管 理 の 要 点	群当たり頭数
哺育前期（出生～7日頃）	・免疫付与 ・人への馴致 ・下痢をさせない	個体飼養が原則。
哺育後期（8日頃～離乳）	・固形飼料の給与で第1胃を発達させる。反すう機能を早めに獲得する事が早期離乳につながります。そのために良質な固形飼料の給与が必要です。	

時 期	管 理 の 要 点	群 当 り 頭 数
離乳してから約2ヶ月まで	<ul style="list-style-type: none"> ・ 離乳と同時に群へ移さない ・ 離乳のストレスと群飼いのストレスを重ねないために離乳後1週間ぐらい以上は個体飼養のままにする。 ・ 離乳後でも頭数が揃うまで個体飼いが続く事もある。 ・ 群行動への馴致 	3～5
離乳後約2ヶ月から 初発情まで	<ul style="list-style-type: none"> ・ 乳腺の発達が特に活発な時期なので太らせない。 ・ バランス良く栄養を充足させる。 	6～10
種付けから妊鑑まで	<ul style="list-style-type: none"> ・ つけるための発情発見 ・ ついた事の確認 ・ 妊娠マイナスか不明を確認。それによって次の発情を注意。 	状況に応じて 頭数を決める
妊鑑終了から分娩前8週まで	<ul style="list-style-type: none"> ・ 安定した時期 ・ 流産に注意。 	
分娩前8週から3週まで	<ul style="list-style-type: none"> ・ 胎児が急速に発育する時期 ・ 胎児の発育と母牛の増体を考えた飼料給与 ・ コンディションを維持する 	
分娩前3週から分娩まで	<ul style="list-style-type: none"> ・ 乾乳牛と一緒にする事で経産牛群への馴致 ・ 成牛舎への馴致 ・ コンディションを維持する 	

群分けの方法は1つではありません。飼養頭数、飼料内容、労働力、施設の種類や配置によって色々な分け方があります。先に述べたように農場全体のレイアウトを考えます。牛、人、機械の動線がスムーズで、群分けが可能で、移動は最短距離で済む…というようなレイアウトを考えるのです。それによって作業が楽になり、牛は発育能力を十分に発揮する事になり、多くの利益が得られるのです。